

大ヴァシリイ聖体礼儀（輔祭なし）

【 重聯禱 】

司祭) われらみなたましい まつと い われら おもい まつと い
我等皆 靈 を全 うして曰わん、我等の 思 を全 うして曰わん、



司祭) しゅぜんのうしゃ わ れつそ かみ なんぢ いの き い あわれ
主 全能者、吾が列祖の神よ、爾 に禱る聆き納れて 憐 めよ、



司祭) かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ
神よ、爾 の大なる 憐 に因りて我等を 憐 めよ、爾 に禱る、聆き納れて 憐 めよ、



司祭) またわ くに てんのうおよ くに つかさど もの ため いの
又我が國の天皇及び國を 司 る者の爲に禱る、



司祭) またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう およ
又 教會を 司 る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、及びハリストスに

お ことごと われら けいてい ため いの
於ける 悉 くの我等の兄弟の爲に禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またわれら けいてい しよしさい しよしゅうどうしさい およ}又我等の兄弟、諸司祭、諸修道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆兄弟
^{ため いの}の爲に禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またつね きおく ふく しせい せいぎょう パトリアルフ せいどう こんりゅうしゃ およ}又恒に記憶せらるる、福たる至聖なる正教の総主教、この聖堂の建立者、及
^{すで ねむ ことごと ふそけいてい こところ しょうほう ほうむ せいぎょう もの ため}び已に寝りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の爲
^{いの}に禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またこ しそん せいどう もの たてまつ ぜんぎょう おこな これ ろう これ うた およ}又此の至尊なる聖堂に物を獻り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び
^{ここ た なんぢ おおい ゆたか あわれみ あお のぞ もの ため いの}此に立ちて爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

(※ 特別な災害や特別な感謝がある時、重聯禱にその旨追加する場合がある。その場合も「主憐め、主憐め、主憐めよ。」と応えて歌う。)

司祭) (黙誦：主我が神よ、爾の諸僕より此の熱切の祈禱を受け、爾が憐の多きに
 よ われら あわれ なんぢ めぐみ われら およ なんぢ ゆたか あわれみ あお
 因りて我等を憐み、爾の恵を我等と凡そ爾の豊なる憐を仰ぐ
 なんぢ たみ つかわ たま
 爾の民に遣し給え、)

司祭) 蓋 爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今
 いつ よよ
 も何時も世に、



【 啓蒙者の聯禱 】

司祭) 啓蒙者よ、主に禱るべし、



司祭) 信者よ、啓蒙者の爲に禱らん、願くは主は彼等に憐を垂れん、



司祭) 眞實の言を以て彼等を啓蒙せん、

しゅ 主 あわれ 憐 め ね よ 。

司祭) ^{ぎ ふくいんけい かれら ひら} 義の福音經を彼等に啓かん、

しゅ 主 あわれ 憐 め ね よ 。

司祭) ^{かれら そのせい こう しと きょうかい いつ} 彼等を其聖・公・使徒の教會に一にせん、

しゅ 主 あわれ 憐 め ね よ 。

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ かれら すく あわれ たす まも} 神よ、爾の恩寵を以て、彼等を救い憐み佑け護れよ、

しゅ 主 あわれ 憐 め ね よ 。

司祭) ^{けいもうしゃ なんぢら こうべ しゅ かが} 啓蒙者よ、爾等の首を主に屈めよ、

しゅ 主 なんぢら に 。

司祭) (黙誦：主我が神、天に居り、爾が悉くの造工を顧る者よ、爾の僕・啓蒙者・其首を爾の前に屈めし者を顧み、彼等に軽き荷を予え、彼等を爾が正教會の尊き肢體となし、彼等に復生の浴盤、諸罪の赦、不朽の衣を賜いて、爾我等の眞の神を識るを致させ給え、)

司祭) 願くは彼等も我等と偕に、爾父と子と聖神の至尊至榮の名を讃揚せん、今も何時も世に、



【 信者の聯禱 1 】

司祭) 衆啓蒙者出でよ、啓蒙者出でよ、衆啓蒙者出でよ、啓蒙者一人もなく、唯信者復又安和にして主に禱らん、



司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) 睿智、

司祭) (黙誦：主よ、爾は我等に此の大なる救の機密を示し、爾は我等卑微にして堪

えざる ^{なんぢ} 爾 ^{ぼく} の ^{なんぢ} 僕に、^{せい} 爾 ^{さいだん} の ^{ほうじしゃ} 聖なる祭壇の ^{ゆる} 奉事者 ^{たま} となるを ^{もと} 許し ^{もと} 給えり、^{もと} 求む
^{なんぢ} 爾 ^{せいしん} が ^{ちから} 聖神の ^{もつ} 力を ^{われら} 以て、^こ 我等 ^{ほうじ} を ^た 此の ^{もの} 奉事に ^{われら} 堪うる者 ^{ていざい} となして、^{ていざい} 我等 ^{ていざい} が ^{ていざい} 定罪
なく ^{なんぢ} 爾 ^{せい} の ^{こうえい} 聖なる ^{まえ} 光榮 ^た の ^{なんぢ} 前に ^{さんび} 立ちて、^{まつり} 爾 ^{ささ} に ^{ささ} 讚美 ^{いた} の ^{たま} 祭 ^{たま} を ^{たま} 獻ぐる ^{たま} を ^{たま} 致させ ^{たま} 給
え。 ^{けだし} 蓋 ^{なんぢ} 爾 ^{しゅうちゅう} は ^{ばんじ} 衆 ^{おこな} 中 ^{もの} に ^{しゅ} 萬事 ^{われら} を ^{つみ} 行 ^{しゅうじん} う者 ^{しゅうじん} なり、^{しゅうじん} 主 ^{しゅうじん} よ、^{しゅうじん} 我等 ^{しゅうじん} の ^{しゅうじん} 罪 ^{しゅうじん} と ^{しゅうじん} 衆 ^{しゅうじん} 人 ^{しゅうじん} の
^{あやまち} 過 ^{ため} と ^{ささ} の ^{ところ} 爲 ^{われら} に ^{まつり} 捧 ^{なんぢ} ぐる ^{まえ} 所 ^い の ^{よろ} 我等 ^{もの} の ^{もの} 祭 ^{もの} が ^{もの} 爾 ^{もの} の ^{もの} 前に ^{もの} 納 ^{もの} れ ^{もの} ら ^{もの} れ ^{もの} 喜 ^{もの} ば ^{もの} る ^{もの} 者 ^{もの} とな
る ^え を ^{たま} 得 ^{たま} せ ^{たま} し ^{たま} め ^{たま} 給 ^{たま} え、)

司祭) ^{けだし} 蓋 ^{およ} 凡 ^{こうえい} そ ^{そん} 光 ^き 榮 ^{ふく} 尊 ^{はい} 貴 ^{なんぢ} 伏 ^{ちち} 拜 ^こ は ^{せいしん} 爾 ^き 父 ^き と ^き 子 ^{いま} と ^{いつ} 聖 ^{よよ} 神 ^{よよ} に ^{よよ} 歸 ^{よよ} す、^{よよ} 今 ^{よよ} も ^{よよ} 何 ^{よよ} 時 ^{よよ} も ^{よよ} 世 ^{よよ} 世 ^{よよ} に、



【 信者の聯禱2 】

司祭) ^{われら} 我等 ^{また} 復 ^{また} 又 ^{あん} 安 ^わ 和 ^{しゅ} に ^{いの} して ^{いの} 主 ^{いの} に ^{いの} 禱 ^{いの} らん、



司祭) ^{かみ} 神 ^{なんぢ} よ、^{おん} 爾 ^{ちゅう} の ^{もつ} 恩 ^{もつ} 寵 ^{われら} を ^{たす} 以 ^{すく} て、^{あわれ} 我等 ^{まも} を ^{まも} 佑 ^{まも} け ^{まも} 救 ^{まも} い ^{まも} 憐 ^{まも} み ^{まも} 護 ^{まも} れ ^{まも} よ、



司祭) ^{えいち} 睿 ^{えいち} 智、

司祭) (^{かみ} 黙 ^{じれん} 誦 ^{こう} : ^{おん} 神 ^{もつ} ・ ^{われら} 慈 ^{ひび} 憐 ^{かえり} 宏 ^{われら} 恩 ^{ひび} を ^{つみ} 以 ^{なんぢ} て ^た 我 ^た 等 ^た の ^た 卑 ^た 微 ^た を ^た 顧 ^た み、^た 我 ^た 等 ^た 卑 ^た 微 ^た に ^た して ^た 罪 ^た ある ^た 爾 ^た の ^た 堪 ^た え

ぼく なんぢ せい こうえい まえ た なんぢ せい さいだん ほうじ
ざる僕を爾が聖なる光榮の前に立てて爾の聖なる祭壇に奉事せしむる

しゅ なんぢ せいしん ちから もつ われら こ ほうじ ため かた われら くち ひら
主よ、爾が聖神の力を以て我等を此の奉事の爲に固め、我等の口を啓

ことば たま ささ さいひん なんぢ せいしん おんちよう よ たま
き言を賜いて、獻げんとする祭品に爾が聖神の恩寵を呼ばしめ給え、)

司祭) われらつね なんぢ けんぺい もと まも こうえい なんぢちち こ せいしん けん ため
我等常に爾が權柄の下に護られて、光榮を爾父と子と聖神に獻ずるが爲なり、

いま いつ よよ
今も何時も世に、



【 ヘルヴィムの歌 】



こすのせいさんしゃにたてまつり

て

このよのつとめをしりぞくべし

しりぞくべし

司祭) (黙誦：肉體の慾と快樂とに縛られし者は、一も爾 光榮の王に來り、或は
 にくたい よく かいらく しば もの ひとり なんぢこうえい おう きた あるい
 近づき、或は奉事するに堪うるなし、蓋 爾に奉事するは、天軍の爲にも大
 ちか あるい ほうじ るた けだしなんぢ ほうじ てんぐん ため おおい
 にして畏るべきなり、然れども 爾は言い難く量り難き 爾の仁愛に因りて、本
 おそ しか なんぢ い がた はか がた なんぢ じんあい よ ほん
 性を易えず 失わずして人となり、我等の爲に司祭首となり、又萬有の主 宰
 せい か うしな ひと われら ため アルヒエレイ またばんゆう しゅさい
 なるに縁りて、我等に此の奉事の無血祭の聖事を傳え給えり、蓋 主我が神や、
 よ われら こ ほうじ むけつさい せいじ つた たま けだししゅわ かみ
 爾は獨 天地の事を宰理す、爾はヘルヴィムの寶座に荷わるる者、セラフィ
 なんぢ ひとりてんち こと さいり なんぢ ほうざ にな もの
 ムの主、イズライリの王、獨 聖にして聖者の中に息う者なり、故に我 爾
 しゅ おう ひとりせい せいしゃ うち いこ もの ゆえ われなんぢ
 ひとりぜん よ い もの いの われつみ た だる なんぢ ぼく かえり わ
 獨 善にして善く納るる者に禱る、我罪ありて堪えざる 爾の僕を顧み、我が

たましい こころ よこしま しりよ きよ われしんびん おんちよう こうむ もの
 靈 と心 とを 邪 なる思慮より淨め、我神品の恩寵を被れる者を、
 なんぢ せいしん ちから よ こ なんぢ せい しょくあん まえ た なんぢ しじょう
 爾が聖神の力に藉りて、此の爾の聖なる食案の前に立ち、爾が至淨
 せいいたいしそん せいけつ きみつ おこな た もの たま けだしわれこうべ
 なる聖體至尊なる聖血の機密を行ふに堪うる者となし給え、蓋我首を
 かが なんぢ つ なんぢ いの なんぢ かんばせ われ き なか われ なんぢ ぼく
 屈めて爾に就き、爾に禱る、爾の顔を我より避くる勿れ、我を爾が僕
 しゅう うち しりぞ なか すなわちわれつみあ あた なんぢ ぼく こ さいもつ
 衆の中より却くる勿れ、乃我罪有りて當らざる爾の僕に此の祭物を
 ささ いた たま けだし わ かみ なんぢ けん もの けん もの
 獻ぐるを致させ給え、蓋ハリストス我が神よ、爾は獻ずる者と獻ぜらるる者、
 う もの わか もの われらこうえい なんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
 受くる者と頌たる者なり、我等光榮を爾と爾の無原の父と至聖至善に
 いのち ほどこ なんぢ しん けん いま いつ よよ
 して生命を施す爾の神とに獻ず、今も何時も世世に、)

司祭) (黙誦: 我等奥密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、

いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ ベ てんし ぐん み にな たてまつ ばん
 今此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬
 ゆう おう いただ よ
 有の王を戴かんとするに縁る、アイルイヤ、アイルイヤ、アイルイヤ。

われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた
 我等奥密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、

いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ ベ てんし ぐん み にな たてまつ ばん
 今此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬
 ゆう おう いただ よ
 有の王を戴かんとするに縁る、アイルイヤ、アイルイヤ、アイルイヤ。

われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた
 我等奥密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、

いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ ベ てんし ぐん み にな たてまつ ばん
 今此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬
 ゆう おう いただ よ
 有の王を戴かんとするに縁る、アイルイヤ、アイルイヤ、アイルイヤ。)

【 大聖入 】

司祭) 願くは主・神は其國に於て、我が國の天皇及び國を司る者を恒に記憶せん、

いま いつ よよ
 今も何時も世世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい きょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう
 願くは主・神は其國に於て、教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教

セラフィムを恒に記憶せん、いま いつ よよ
 今も何時も世世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい すで ねむ ふしゅきょう ふしゅきょう ふ
 願くは主・神は其國に於て、已に寢りし府主教セルギイ、府主教イリネイ、府

しゅきょう ふしゅきょう ふしゅきょう だいしゅきょう しゅ
 主教ウラディミル、府主教フェオドシイ、府主教ダニイル、大主教ニコライ、主

きょう しゅきょう およ こと きおく われら すで ねむ かぞく
教ニコライ、主 教ペトル、(及び殊に記憶せらるる 某) 我等の已に寝りし家族、

けいていしまい もるもろ えんしゃ ほうゆうら つね きおく いま いつ よよ
兄弟姉妹、 諸 の縁者、 朋友等を恒に記憶せん、 今も何時も世世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい なんぢしゅうせいきょう ら つね きおく
願くは主・神は其國に於て、爾 衆 正 教 のハリストティアニン等を恒に記憶せん、

いま いつ よよ
今も何時も世世に、

ア ミ ン。

か 神 み の なみい るつか い は み え ずしてにな いたてま 担 獻

つ る ばんぶ 物の つのつかさ を い た だ け ば な り

ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ ア

リ ル イ ヤ

司祭) (黙誦： 尊とうときイオシフは爾なんぢの潔いさぎよき身を木より下し、淨きよき布ぬのに裹つつみ、香かうりよう料りようにて

覆おおい、新あらたなる墓はかに藏おさめり、

ハリストスよ、爾なんぢは神かみなるにより、體からだにて墓はかに在り、靈あにて地獄ちごくに在り、

右盜うとうと偕ともに天堂てんどうに在り、父ちちと聖神せいしんと共に寶座ほうざに在り、限かぎりなき者ものとして一いつ

切さいを満みて給たまえり、

ハリストスよ、我わが復ふくかつ活いつみの泉なんぢたる爾はかの墓いのちは、生命ほどこを施ものす者ちどう、地堂ちどうより

美うるわしき者もの、実じつに如何いかなる王おうの宮みやよりも耀かがやける者ものと顯あらわれたり、

尊とうときイオシフは爾なんぢの潔いさぎよき身を木より下し、淨きよき布ぬのに裹つつみ、香かうりよう料りようにて

覆おおい、新あらたなる墓はかに藏おさめり、

主しゅよ、爾なんぢの惠めぐみに因よりて恩おんをシオンたに垂たれ、イエルサリムじょうえんの城た垣たまを建たて給

え、其そのとき時に爾なんぢ義ぎの祭まつり、獻ささげ物ものと燔やき祭まつりを喜よろこび饗うげん、其そのとき時に人ひと々びと爾なんぢ

の祭壇さいだんに犢こうしを奠そなえんとす、)

【 増聯禱 】

司祭) 我われ等らしゅ主まの前に吾わが禱いのりを増まくわくわえん、



司祭) 獻ささげたる尊とうとき祭品さいひんの爲ために主しゅに禱いのらん、



司祭) 此この聖堂せいどう、及および信しんと慎つつしみと神かみを畏おそる心こころとを以もつて此こに來きたる者ものの爲ために主しゅに禱いのらん

ん、

しゅ あわれ め よ。
主 憐

司祭) われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの
我等 諸 の憂愁と忿怒と危難とを 免るるが爲に主に禱らん、

しゅ あわれ め よ。
主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あわれ め よ。
主 憐

司祭) こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと
此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、

しゅ たま え よ。
主 賜

司祭) へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしゃ たま しゅ もと
平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、

しゅ 主 た 賜 ま え よ 。

司祭) われら つみ あやまち なた ゆる しゅ もと
我等の罪と 過 とを宥め赦さんことを主に求む、

しゅ 主 た 賜 ま え よ 。

司祭) われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと
我等の 靈 に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、

しゅ 主 た 賜 ま え よ 。

司祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、

しゅ 主 た 賜 ま え よ 。

司祭) われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ
我等の生命の 終 がハリストシアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及び
ハリストスの畏るべき審判に於て宜しき 對 をなすを賜わんことを求む、



司祭) ^{しせいしけつ} 至聖至潔 ^{いた} にして ^{さんび} 至りて ^{われら} 讚美 ^{こうえい} たる ^{ぢよさい} 我等の ^{しょうしんぢよ} 光榮 ^{えいていどうぢよ} の女 ^{せい} 宰・生 ^{せい} 神女・永 ^{せい} 貞童 ^{せい} 女 ^{せい} マリヤ

^{しよせいじん} と、^{きおく} 諸聖人 ^{われらおのれ} とを記憶 ^{みおよ} して、^{たがい} 我等 ^{おのおの} 己の身 ^み 及び ^{もつ} 互に ^{ならび} 各の身 ^{ことごと} を以て、^{ことごと} 並に ^{ことごと} 悉く

^{われら} 我等 ^{いのち} の生命 ^{もつ} を以て、^{かみ} ハリストス ^{いたく} 神に委託 ^{いたく} せん、



司祭) (黙誦: ^{しゅわ} 主 ^{かみ} 我が ^{われら} 神、^{つく} 我等 ^{このいのち} を造りて ^い 此の生命 ^{われら} に入れ、^{すくい} 我等 ^{みち} に救 ^{しめ} の道 ^{われら} を示し、^{てん} 我等 ^{てん} に天

^{じょう} 上 ^{おうみつ} の奥 ^{けいし} 密 ^{たま} の啓示 ^{もの} を賜 ^{なんぢ} いし者 ^{なんぢ} よ、^{せいしん} 爾 ^{ちから} は ^{もつ} 爾 ^{われら} が ^こ 聖神 ^こ の力 ^こ を以て、^こ 我等 ^こ を此

^{ほうじ} 上 ^{ため} の奉事 ^た の爲 ^{たま} に立 ^{もと} て給 ^{しゅ} へり、^{われら} 求 ^{なんぢ} む主 ^{しんやく} よ、^{ほうじしや} 我等 ^{なんぢ} が ^{せい} 爾 ^{せい} の新約 ^{せい} の奉事 ^{せい} 者 ^{せい} 爾 ^{せい} の聖

^{きみつ} 機密 ^{えきしや} の役 ^{よみ} 者 ^{なんぢ} となる ^{じれん} を嘉 ^{おお} し、^よ 爾 ^{われら} が ^{なんぢ} 慈憐 ^{せい} の多 ^{せい} き ^{せい} に困 ^{せい} りて、^{せい} 我等 ^{せい} 爾 ^{せい} の聖 ^{せい} なる

^{さいだん} 祭壇 ^{ちか} に近 ^{もの} づく者 ^い を納 ^{たま} れ給 ^{ねがわ} へ、^{われら} 願 ^わ くは ^{つみ} 我等 ^{しゅうじん} は、^{あやまち} 我が ^{あやまち} 罪 ^{あやまち} と衆 ^{あやまち} 人 ^{あやまち} の過 ^{あやまち} との

^{ため} 爲 ^{なんぢ} に、^{これいち} 爾 ^{むけつ} に此 ^{まつり} の靈智 ^{ささ} なる無 ^た 血 ^{もの} の祭 ^{いの} を獻 ^{なんぢ} ぐるに堪 ^{なんぢ} うる者 ^{なんぢ} とならん、^{なんぢ} 祈 ^{なんぢ} る 爾

^{これ} 之 ^{なんぢ} を 爾 ^{てんじょう} の聖 ^{むけい} なる天 ^{さいだん} 上 ^お の無 ^{けいこう} 形 ^{これ} の祭 ^う 壇 ^{われら} に置 ^{われら} き、^{われら} 馨 ^{われら} 香 ^{われら} として ^{われら} 之 ^{われら} を享 ^{われら} け、^{われら} 我等 ^{われら} に

^{むく} 報 ^{なんぢ} ゆるに ^{せいしん} 爾 ^{おんちよう} が ^{くだ} 聖神 ^{もつ} の恩 ^{かみ} 寵 ^{われら} を降 ^{のぞ} すを以 ^こ てせよ、^こ 神 ^こ よ、^こ 我等 ^こ に臨 ^こ み、^こ 此 ^こ の我

^ら 等 ^{ほうじ} の奉事 ^{かえり} を顧 ^{これ} みて、^う 之 ^{ささげもの} を享 ^{まつり} くること、^{まつり} アヴェ ^{まつり} リの獻 ^{まつり} 物 ^{まつり} ノイ ^{まつり} の祭 ^{まつり} 、^{まつり} アブラ ^{まつり} ア

^{はんさい} ム ^{しんしよく} の燔 ^{わへいさい} 祭 ^う 、^{ごと} モイ ^{ごと} セイ ^{ごと} とア ^{ごと} ア ^{ごと} ロン ^{ごと} との神 ^{ごと} 職 ^{ごと} 、^{ごと} サ ^{ごと} ム ^{ごと} イ ^{ごと} ル ^{ごと} の和 ^{ごと} 平 ^{ごと} 祭 ^{ごと} を享 ^{ごと} けしが ^{ごと} 如 ^{ごと} く

^{しゅ} せよ、^{なんぢ} 主 ^{せいしと} よ、^こ 爾 ^{まこと} 曾 ^{ほうじ} て ^う 聖 ^{ごと} 使 ^{ごと} 徒 ^{ごと} より ^{われら} 此 ^{ごと} の ^{ごと} 眞 ^{ごと} の奉 ^{ごと} 事 ^{ごと} を享 ^{ごと} けしが ^{ごと} 如 ^{ごと} く、^{ごと} 我等 ^{ごと} 罪 ^{ごと} なる

^{もの} 者 ^て の手 ^{なんぢ} よりも、^{じんじ} 爾 ^{もつ} の仁 ^こ 慈 ^{ささげもの} を以 ^う て ^{たま} 此 ^か の ^{ごと} 獻 ^{ごと} 物 ^{ごと} を享 ^{ごと} け給 ^{ごと} へ、^{ごと} 此 ^{ごと} の ^{ごと} 如 ^{ごと} く、^{ごと} 我等 ^{ごと} を

^{きず} 玷 ^{なんぢ} なく ^{せい} 爾 ^{さいだん} の聖 ^{ほうじ} なる祭 ^{われら} 壇 ^{なんぢ} に奉 ^ぎ 事 ^{むくい} せしめて、^{おそ} 我等 ^{おそ} に ^{おそ} 爾 ^{おそ} の義 ^{おそ} なる ^{おそ} 報 ^{おそ} の畏 ^{おそ} る ^{おそ} べき

ひ おい ちゅう ち いえつかさ むくい え いた たま
日に於て、忠にして智なる家宰の賞を得るを致させ給え、)

司祭) なんぢ どくせいし じれん よ なんぢ かれ しせいしぜん いのち ほどこ なんぢ しん
爾の獨生子の慈憐に因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神
とも あが ほ いま いつ よよ
と偕に崇め讃めらる、今も何時も世に、



【 ニケア・コンスタンチヌーポリ全地公会にて採択されし信經 】

司祭) しゅうじん へいあん
衆人に平安、



司祭) われらたがい あいあい どうしん う みと ため
我等互に相愛すべし、同心にして承け認めんが爲なり、



司祭) (黙誦: しゅわれ ちから われなんぢ あい しゅ われ かため われ かくれが しゅわれ
主我の力よ、我爾を愛せん、主は我の防固、我の避所なり、主我の

ちから われなんぢ あい しゅ われ かため われ かくれが しゅわれ ちから われ
力よ、我爾を愛せん、主は我の防固、我の避所なり、主我の力よ、我

なんぢ あい しゅ われ かため われ かくれが
爾を愛せん、主は我の防固、我の避所なり、)

司祭) もん もん つつし き
門、門、敬みて聽くべし、

聖体礼儀③ (大ヴァシリイ) -16

れらのためにポンテ イ ピ ラ ト の ときじゅうじかに
 等 爲 時 十 字
 くぎうた れ 、 くるしみをうけほうむら
 釘 苦 受 葬
 れ 、 だ いさんじつにせいしょにかないてふく
 第 三 日 聖 書 應 復
 か っ し 、 てんにのぼり、ちちのみぎにぎ坐
 活 天 升 父 右 坐
 し こう え い を あ ら わ し て い け る も の と し せ
 光 榮 顯 生 者 死
 し も の と を しんぱんす る た め に ま た き た り 、
 者 審 判 爲 還 來
 そ の く に お わ り な か ら ん を 、 ま た しんず、せ
 其 國 終 又 信 聖
 いしんしゅいのちをほどこすものちちよりい
 神 主 生 命 施 者 父 出
 で 、 ちちおよびことともにおがまれほめら
 父 及 子 共 拜 讚
 れ、よげんしゃをもつてかつていいしを、また
 預 言 者 以 嘗 言 又
 しんず、ひとつのせいなるおおやけなるしとの
 信 一 聖 公 使 徒
 きょうか いを、われみとむ、ひとつのせんれ
 教 會 我 認 一 洗 禮

い、もって つみの ゆるしを うるを、われの望
 以 罪 赦 得 るを、我 望

ぞむししゃのふくか つ、ならびにらいせい
 死者 復 活 並 來 世

のいのちを、アミン。
 生 命

【 アナフォラ 】

司祭) ^{ただ た おそ た つつし あんわ せい ささげもの たてまつ} 正しく立ち、畏れて立ち、敬みて安和にして聖なる獻物を奉らん、

へい わの あわれ み さ んよ うの ま つ
 平 和 の 憐 れ み さ んよ うの ま つ

り を

司祭) ^{ねがわ わ しゅ めぐみ かみちち いつくしみ せいしん したしみ なんぢしゅう} 願くは我が主イイススハリストスの恩、神父の慈、聖神の親は、爾衆

^{じん とも あ} 人と偕に在らんことを、

な んぢ の し んと も
 爾 衆 の 神 と 偕

司祭) ^{こころうえ むか} 心上に向うべし、

しゅにむかえり
主に向かえり

司祭) ^{しゅ かんしゃ} 主に感謝すべし、

ちとこ子とせいしんちちと
父と子と聖いしんちちと

こ子とせいしんいんいつたいにし
子と聖いしんいんいつたいにし

てわかれざるせいさんしゃは
てわかれざるせいさんしゃは

とうとみおがまるべしとうとみお拜
と尊うとみおがまるべしと尊うとみお拜

がまるべし

司祭) (黙誦：永在の主宰・主・神・父・全能者・拜まるる者よ、爾を讚美し、爾
 を歌頌し、爾を讚揚し、爾に伏拜し、爾に感謝し、爾獨實在す
 る神を讚榮し、悔悟の心と謙卑の靈とを以て、爾に此の靈智の奉事を
 獻ぐるは、誠に當然に誠に義にして、誠に爾が聖位の威嚴に適えり、
 蓋爾は我等に爾の眞實を知るを賜いし主なり、主宰よ、孰か能く爾
 の能力を言い、爾が悉くの讚美を傳え、爾が諸時の諸奇蹟を宣ぶる
 に堪えん、爾は萬有の主宰、天と地、見ゆると見えざる萬物の主、光榮の
 寶座に坐し、淵を鑒み、始なく、見る可からず、測る可からず、象る可か
 らず、變らざる者、我が主イイススハリストス、大なる神及び救世主、我
 等の恃なる者の父なり、彼は爾が至善の像、同形の印、己の中に爾
 父を顯す者、生活の言、眞の神、永遠の智慧・生命・成聖・能力・
 眞の光なり、彼に因りて聖神現れたり、乃眞實の神、義子とする恩
 賜、將來の嗣業の聘質、永福の始、生活を施す力、成聖の泉な
 り、悉くの有言有智の造物は、彼に固められて爾に奉事し、爾に
 永遠の讚榮を獻ず、蓋萬有は爾に務む、天使・天使首・寶座・主制・
 首領・權柄・能力・多目のヘルヴィムは爾を讚美し、セラフィムは爾
 を環りて立つ、各六翼あり、二翼其面を蔽い、二翼其足を覆い、二翼
 を以て飛び、緘ぢざる口、黙さざる讚榮を以て互に相呼ぶ、)

司祭) 凱歌を歌い、籲び、叫びて曰う、



るしゅ主 サヴァオ フてんち地に

な爾 んちのこ光 うえ榮 いはあ遍 まね し い至 とた高 かき

にオサンナ い至 とた高 かきにオサンナ

しゅのな名 にてきた るも者 のは しゅの主

な名 にてきた るも者 のは あ崇 が

めあ崇 がめほ讚 めらる い至 とた高

かきにオサンナいとたかきに

オサンナ

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい われらつみ もの こ ふく ぐん とも よ い なんぢ}人を愛する主宰よ、我等罪ある者も此の福たる軍と偕に籲びて曰う、爾

^{せい かな まこと しせい かな なんぢ せい いげん はか がた なんぢ ことごと}は聖なる哉、誠に至聖なる哉、爾が聖位の威嚴は測り難し、爾は悉

^{しわざ せい ぎ まこと しんばん もつ ことごと われら ほどこ よ}くの行爲に聖なり、義と眞の審判とを以て悉く我等に施ししに因る、

^{けだしかみ なんぢ ち ちり と ひと つく なんぢ ぞう もつ これ とうと}蓋神よ、爾は地より塵を取りて人を造り、爾の像を以て之を貴くし、

^{これ かんび ちどう お これ なんぢ いましめ まも ため し いのち えい}之を甘美なる地堂に置き、之に爾の誠を守るが爲に、死せざる生命と永

^{ふく たのしみ やく たま しか かれ なんぢかれ つく まこと かみ そむ}福の樂とを約し給えり、然れども彼は、爾彼を造りし眞の神に背き、

^{へび いざない まよ おのれ つみ ころ かみ なんぢ ぎ しんばん}蛇の誘に迷わされ、己の罪に殺されしにより、神よ、爾は義の審判を

^{もつ かれ ちどう こよ おい かれ つく ため と つち かせ}以て彼を地堂より此の世に逐い出だし、彼を造るが爲に取りたる土に歸し、

^{なんぢ もつ かれ ため ふくせい すくい もう たま しぜんしゃ けだし}爾のハリストスを以て、彼が爲に復生の救を設け給えり、至善者よ、蓋

^{なんぢ おわり いた なんぢ つく もの かお さ なんぢ て しわざ わす}爾は終に至るまで、爾が造りし物より顔を避けず、爾が手の行爲を忘れ

^{すなわちなんぢ じんじ あわれみ よ たほう もつ これ かせり よげんしゃ つかわ}ず、乃爾が仁慈の憐に因りて、多方を以て之を顧み、預言者を遣

^{なんぢ せいじん るいだいなんぢ よろこ もの もつ いのう おこな なんぢ ぼくしょ}し、爾の聖人、累代爾を喜ばしし者を以て異能を行い、爾の僕諸

^{よげんしゃ くち もつ われら つ あらかじ しょうらい すくい し ほうりつ}預言者の口を以て我等に告げて、預め將來の救を知らしめ、法律を

^{たま たすけ しょうてんし た しゅごしゃ とき み およ われら}賜いて助となし、諸天使を立てて守護者となし、時の満つるに及びて、我等

^{つ なんぢ こもつ なんぢ かれ もつ よよ つく かせ なんぢ こう}に告ぐるに爾の子を以てせり、爾は彼を以て世を造れり、彼は爾が光

^{えい ひかり なんぢ せい い しょうぞう かせ そのうりよく ことば ばんぶつ ふち}榮の光、爾が聖位の肖像なり、彼は其能力の言にて萬物を扶持し

おのれ なんぢかみ ちち ひと せん しか えいざい かみ ち
 て、己を爾神・父に匹しくするを僭とせず、然れども永在の神にして地に
 あらわ ひと とも いま せい どうていぢよ み と おのれ むなし ぼく
 顯れ、人と偕に在し、聖なる童貞女より身を取り、己を虚くし、僕の
 かたち う われら ひせん からだ に もの たま われら そのこうえい かたち
 形を受け、我等の卑賤の體に肖たる者となり給えり、我等を其光榮の形
 に 肖たる者となさんが爲なり、蓋 人に因りて罪は世に入り、罪に因りて死も亦
 い なんぢ どくせいし なんぢかみ ちち ふところ お もの おんなすなわちせい
 入りしにより、爾の獨生子、爾神・父の懷に居る者は、婦即聖な
 どうていぢよ えいていどうぢよ うま ほうりつ もと あ あまん おのれ
 る童貞女・永貞童女マリヤより生れ、法律の下に在りて、甘じて己の
 み おい つみ ぎてい うち し もの なんぢ うち ふく
 身に於て罪を擬定せり、アダムの中に死する者が爾のハリストスの中に復
 せい ため かれ こ よ お すくい ほどこ かいめい たま われら ぐうぞう
 生せん爲なり、彼は此の世に居り、救を施す誠命を賜い、我等を偶像の
 まどい のが われら みちび なんぢまこと かみ ちち し いた われら
 惑より脱し、我等を導きて爾眞の神・父を知るに至らしめ、我等を、
 せん こうむ ぞく おう しんぴん せい たみ おのれ え みづ もつ われら きよ
 選を蒙る族、王たる神品、聖なる民として己に獲て、水を以て我等を淨
 せいしん もつ せい おのれ あがない われらつみ もと う もの つな
 め、聖神を以て聖にし、己を贖として、我等罪の下に賣られたる者を繫
 ところ し あた おのれ もつ ばんゆう じゅうまん ため じゅうじか よ
 ぎし所の死に予え、己を以て萬有を充滿するが爲に、十字架に由りて
 ちごく くだ し やまい と だいさんじつ ふくかつ およそ にくたい ため し
 地獄に降り、死の病を釋き、第三日に復活して、凡の肉體の爲に死よ
 ふくかつ みち ひら けだしふはい いのち かしら つな あた ししゃ うち
 り復活する途を啓き、(蓋腐敗は生命の首を繫ぐ能わず)死者の中より
 しゅせい もの し もの うち しゅじつ み みづか ばんゆう うち ばん
 首生する者として、死せし者の中に首實の果となれり、親ら萬有の中に萬
 じ はじめ ため てん のぼ なんぢ しだいい みぎ そのたか ぎ ふたた
 事の首始たらんが爲なり、天に升起、爾が至大位の右に其高きに坐し、再
 きた かくじん そのおこない よ むく たま かれ われら そのすくい ほどこ
 び來りて、各人に、其行に依りて報い給わん、彼は我等に其救を施
 くるしみ きおく のこ すなわちこ われら かれ いましめ よ ささ ところ もの
 す苦の記憶を遺せり、即此の我等が彼の誠に因りて獻げし所の者
 けだしおのれ せかい いのち ため わた よ そのじゆう えいえん きおく
 なり、蓋己を世界の生命の爲に付しし夜、其自由にして永遠に記憶すべ
 いのち ほどこ し い のぞ そのせい しじょうむてん て へい と
 き生命を施すの死に出づるに臨みて、其聖にして至淨無玷なる手に餅を取
 なんぢかみ ちち ささ かんしゃ しゅくさん せいせい さ
 り、爾神・父に捧げ、感謝し、祝讚し、成聖し、擘きて、)

そのせい もんとおよ しと あた い と くら これわ たい なんぢら ため さ
 司祭) 其聖なる門徒及び使徒に予えて曰えり、取りて食べ、是我が體、爾等の爲に擘かる

もの つみ ゆるし え いた
 る者、罪の赦を得るを致す、



司祭) (黙誦: ^{おなじ ぶどうじる も しゃく と みづ わ かんしゃ しゅくさん せいせい}同く葡萄酒を盛る爵を取りて水を和し、感謝し、祝讃し、成聖して、)

司祭) ^{そのせい もんとおよ すと あた い みなこれ の これわれ しんやく ち なんぢらおよ}其聖なる門徒及び使徒に予えて曰えり、皆之を飲め、是我の新約の血、爾等及び

^{おお ひと ため なが もの つみ ゆるし え いた}衆くの人^の爲に流さるる者、罪の赦を得るを致す、



司祭) (黙誦: ^{これ おこな われ きおく けだしなんぢらこ へい くら こ しゃく の ごと}此を行いて我を記憶せよ、蓋爾等此の餅を食い、此の爵を飲む毎に、

^{われ し つた われ ふくかつ みと しゅさい ゆえ われら かれ すくい ほどこ}我の死を傳え、我の復活を認む、主宰よ、故に我等も、彼が救を施す

^{くるしみ いのち ほどこ じゅうじか みつか ほうむり し ふくかつ てん のぼ こと なんぢ}苦、生命を施す十字架、三日の瘞、死よりの復活、天に升る事、爾

^{かみ ちち みぎ ぎ こと こうえい おそ かれ さいど こうりん きおく}神・父の右に坐する事、光榮にして畏るべき彼が再度の降臨を記憶して、)

司祭) ^{なんぢ たまもの なんぢ しょぼく しゅう ためいつさい ため なんぢ たてまつ}爾の賜を、爾の諸僕より、衆の爲一切の爲に爾に獻りて、



め あ揚 げ な 爾 んぢ を ほ 讃 め あ揚

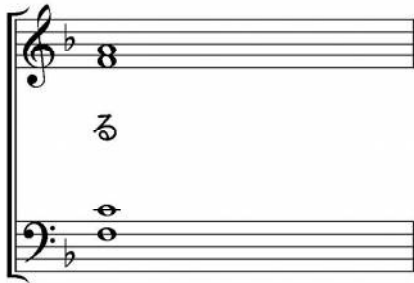
げ な 爾 んぢ に かんしゃ し な 爾 んぢ に

か 感 んしゃ し わ 我 が か 神 み や な 爾 んぢ に い 禱

の る い 禱 の る わ 我 が か 神 み や な 爾 んぢ

に い 禱 の る わ 我 が か 神 み や な 爾 んぢ に

い 禱 の る わ 我 が か 神 み や



司祭) (黙誦: ^{しせい しゅさい これ もつ われら た ぼく われら ぎ よ あら けだし} 至聖なる主宰よ、是を以て我等も堪えるざる僕、我等の義に因るに非ず、(蓋
^{ち あ なん ぜん な すなわちなんぢ あつ われら そそ なんぢ じれん こう} 地に在りて何の善をも爲さず) 乃 爾 が厚く我等に注ぎし 爾 の慈憐と宏
^{おん よ なんぢ せい さいだん ほうじ え もの あえ なんぢ せい} 恩とに依りて、 爾 の聖なる祭壇に奉事するを獲し者は、敢て 爾 の聖なる
^{さいだん ちか なんぢ せいたいせいけつ しんぞう ささ なんぢ いの} 祭壇に近づき、 爾 がハリストスの聖體聖血の眞像を獻げて 爾 に祈り、
^{なんぢ よ しょせい せい もの なんぢ しぜん じんあい よ なんぢ せいしん} 爾 を籲ぶ、諸聖の聖なる者よ、 爾 が至善の仁愛に藉りて、 爾 の聖神を
^{われらおよ こ そな さいひん のぞ これ しゆくふく これ せい これ} 我等及び此の奠えたる祭品に臨ましめ、之に 祝 福し、之を聖にし、之を
^{あらわ} 顯 して、)

司祭) (黙誦: ^{だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と} 第三時に 爾 の至聖神を 爾 の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取
^{あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた かみ いさぎよ} り上ぐる事勿れ、尚我等 爾 に祈る者の衷に之を新 にせよ、神よ、 潔
^{こころ われ つく ただ たましい われ うち あらた たま だいさんじ なんぢ し} き 心 を我に造り、正しき 靈 を我の衷に 改め給え、第三時に 爾 の至
^{せいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と あ なか} 聖神を 爾 の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取り上ぐる事勿れ、
^{なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた われ なんぢ かんばせ お} 尚我等 爾 に祈る者の衷に之を新 にせよ、我を 爾 の 顔 より逐うこと
^{なか なんぢ せいしん われ と あ なか だいさんじ なんぢ しせいしん} 勿れ、 爾 の聖神を我より取り上ぐる事勿れ、第三時に 爾 の至聖神を
^{なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と あ なか なおわれら} 爾 の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取り上ぐる事勿れ、尚我等
^{なんぢ いの もの うち これ あらた} 爾 に祈る者の衷に之を新 にせよ、)

司祭) ^{こ へい もつ しゅ かみ われら きゅうせいしゅ まこと ぞんたい な} 此の餅を將て、主・神・我等の救世主イイススハリストスの眞の尊體と爲し、ア

ミン。此の爵^{こ しゃく もつ}を将て、主・神・我等^{しゅ かみ われら きゆうせいしゅ}の救世主^{まこと}イイススハリストスの眞^{まこと}の尊血^{そんけつ}、ア
 ミン、世界^{せかい}の生命^{いのち}の爲^{ため}に流^{なが}されし者^{もの}と爲^なし、アミン。爾^{なんぢ}の聖神^{せいしん}を以て之^{もつ}を變化^{これ へんか}せよ、
 アミン。アミン。アミン。

(黙誦：我等衆人^{われらしゅうじん}一餅^{いつぺい}一爵^{いつしゃく}を領^うくる者を、惟一^{ゆいつ}の聖神^{せいしん}に體合^{たいごう}するを以て

互^{たがい}に和合^{わごう}せしめ、我が中^{わ うち}一人^{ひとり}も、爾^{なんぢ}がハリストスの聖體^{せいたい}聖血^{せいけつ}を領^うくるを以

て、審案^{しんあん}或^{ある}は定罪^{ていざい}を得^えるを致^{いた}す勿^{なか}れ、乃^{すなわち}我等^{われら}に古世^{こせい}より爾^{なんぢ}の喜^{よろこび}を

爲^なしし諸聖人^{しよせいじん}・元祖^{げんそ}・列祖^{れつそ}・太祖^{たいそ}・預言者^{よげんしゃ}・使徒^{しと}・傳道者^{でんどうしゃ}・福音者^{ふくいんしゃ}・致

命者^{めいしゃ}・表信者^{ひょうしんしゃ}・教師^{きょうし}、及び凡^{およ およ}そ信^{しん}を以て終^{おわ}りし義^ぎなる靈^{たましい}と偕^{とも}に、慈

憐^{れん}と恩^{おん}寵^{ちよう}とを獲^えせしめ給^{たま}え、)

司祭^{こと} 特^{しせい}に至^し聖^{せい}至^し潔^{けつ}にして至^{いた}りて讚美^{さんび}たる我等^{われら}の光榮^{こうえい}の女宰^{ぢよさい}・生神女^{しょうしんぢよ}・永貞童女^{えいていどうぢよ}マ

リヤと偕^{とも}に、

【 常に福^{とく} に代^かえて 】 ※祭日^{ざだすトイニク}に他の「生神女の歌」を歌う例あり

ちえな るてんどう う ど童 うていぢよのほまれ
 智 慧 天 堂 童 貞 女 譽 まれ

な り よの な き さ き よ り わ が か み
 な り よの な き さ き よ り わ が か 神 み

な る も の なんぢ よ り み を う け み ど り ご 兒
 者 爾 身 受 嬰 どり 兒

と な れ り なんぢ の ふ と こ ろ を ほ う ざ と
 爾 の 胎 と こ ろ を 寶 座 と

な し なんぢ の は ら を てん よ り ひ ろ き も の
 爾 の 腹 天 廣 き 者 の

と な せ り おんちよ う を み ち こうむる も の よ
 恩 寵 う を 満 ち 被 者 の よ



司祭) (黙誦: せいよげんしゃ ぜんく じゅせん こうえい さんび せいしと およ
び爾が諸聖人と偕に、慈憐と恩寵とを獲せしめ給え、神よ、彼等の祈禱

よ われら かえり ならび およ えいせい ふくかつ のぞみ いだ ねむ もの き
に因りて我等を顧み、並に凡そ永生の復活の望を懐きて寝りし者を記

おく たま
憶し給え、

かみ ぼくひ きゅうしょく けんこ しょざい ゆるし たため いの
神の奴婢(某)の救贖・眷顧・諸罪の赦の爲に禱る、

かみ ぼくひ たましい あんそく たため これ ひか ところ かなしみ なげき
神の奴婢(某)の靈の安息の爲、之を光る處、悲と歎との

とお ところ お たため いの わ かみ かれら なんぢ かんばせ ひかり たら
遠ざかる所に置くが爲に禱る、我が神よ、彼等を爾が顔の光の照す

ところ あんちあんそく たま
所に安置安息せしめ給え、

またなんぢ いの しゅ なんぢ せい こう しと きょうかい せかい はて はて いた
又爾に禱る、主よ、爾の聖・公・使徒の教會、世界の極より極に至

もの きおく なんぢ とうと ち え ところ もの へいあん およ
る者を記憶し、爾がハリストスの尊き血にて獲し所の者を平安にし、及

こ せい どう けんご よ おわり いた たま しゅ こ さいぶつ なんぢ
び此の聖なる堂を堅固にして世の終に至らしめ給え、主よ、此の祭物を爾

ささげ もの およ そのだれ たため だれ もつ だれ かわ ささげ きおく
に獻げし者、及び其誰が爲に、誰を以て、誰に代りて獻しを記憶せよ、

しゅ なんぢ しょせいどう もの たてまつ ぜんぎょう おこな およ ひんしゃ きおく
主よ、爾の諸聖堂に物を獻り、善業を行い、及び貧者を記憶す

もの きおく なんぢ ゆたか てんじょう おんし もつ かれら むく てん もの
る者を記憶して、爾が豊なる天上の恩賜を以て彼等に酬い、天の物を

もつ ち もの か ふきゅう もの もつ ふはい もの か かれら たま しゅ
以て地の物に易え、不朽の物を以て腐敗の物に易えて彼等に賜え、主よ、

こうや さんれい がんけつ ちくつ あ もの きおく しゅ どうてい けいけん きんしょく
曠野・山嶺・巖穴・地窟に在る者を記憶せよ、主よ、童貞・敬虔・禁食・

けつじょう もつ いのち わた もの きおく しゅ わ くに てんのう なんぢ こ ち
潔 淨 を以て 生 を度る 者を記憶せよ、主よ、我が國の 天皇、爾 が斯の地
おう よみ もの きおく しんじつ ぶぐじんじ ぶぐ かれ お たたかい
に王たるを嘉せし者を記憶し、眞 實の武具仁慈の武具を彼に佩ばしめ、 戦
ひ おい そのこうべ おお そのひぢ つよ そのみぎ て たこ そのくに けんご
の日に於て其 首 を廕い、其 臂を強くし、其 右の手を高うし、其 國を堅固
およ たたかい ほつ いほうみん かれ きふく うば ふか
にし、凡そ 戦 を欲する異邦民を彼に歸服せしめ、奪 うべからざる 深き
へいあん かれ たま かれ こころ なんぢ きょうかい ため およ なんぢ しゅうじん ため
平安を彼に賜い、彼の 心に爾 が 教會の爲、及び 爾 が 衆 人の爲に
ぜんじ つ たま かれ へいわ われら およそ けいけん けつじょう もつ てん
善事を告げ給え、彼の 平和により、我等が 凡 の 敬 虔と 潔 淨 とを以て、恬
せいあんぜん いのち わた ため しゅ くに つかさど もの きおく ぜん
靜 安然として 生 を度らんが爲なり、主よ、國を 司 る者を記憶せよ、善
もの ぜん まも あく もの なんぢ じんじ もつ ぜん もの な たま しゅ
なる者を善に守り、悪なる者を 爾 の仁慈を以て善なる者と爲し給え、主よ、
ここ た しゅうじん およ や あた ゆえ よ きた もの きおく なんぢ じ
此に立つ 衆 人、及び已む能わざる故に因りて來らざる者を記憶し、爾 が慈
れん おお よ かれら われら あわれ たま かれら くら もろもろ よきもの み
憐の多きに因りて、彼等と我等とを 憐 み給え、彼等の庫に 諸 の善物を盈
たし、かれら ふうふ へいわ どうしん まも みどりご よういく しょうねん くんどう
たし、彼等の夫婦を平和と同心とに護り、嬰 兒を養育し、少 年を訓導
ろうしや ふち こころせば もの なぐさ さん もの あつ まよ
し、老 者を扶持し、心 狭みたる者を 慰 め、散じたる者を 聚 め、迷わされ
もの かえ なんぢ せい こう した きょうかい あ たま おき くるし
し者を歸して、爾 が 聖・公・使徒の 教會に合わせ給え、汚鬼に 苦 めらる
ものを 釋き、こうかい もの とも こうかい りよこう もの とも りよこう やもめ
る者を釋き、航海する者と偕に航海し、旅行する者と偕に旅行し、嫠婦を
かば みなしご まも とりこ もの すく やまい うれ もの いや たま かみ
庇い、孤 子を護り、擄 となりし者を救い、病 を患うる者を醫し給え、神
さいばん こうさん るざい くえき およ およ うれい なやみ あやうき お もの き
よ、裁 判・鑛 山・流 罪・苦 役、及び凡そ憂愁と患難と危 難とに居る者を記
おく しゅわ かみ およ なんぢ おおい あいれん もと もの またわれら あい
憶せよ、主我が神よ、凡そ 爾 の 大なる愛 憐を求むる者、又我等を愛す
もの われら にく もの われらあた もの かわ いの たく もの およ なんぢ
る者、我等を惡む者、我等當らざる者に代り祈るを託せし者、及び 爾 の
しゅうじん きおく しゅう なんぢ ゆたか じれん そそ しゅう そのもと ところ およ
衆 人を記憶し、衆 に 爾 の 豊 なる慈 憐を注ぎ、衆 に其 求むる 所、凡
すくい ため せつよう もの あた たま かみ われらし あるい わす
そ 救 の爲に切 要なる者を予え給え、神よ、我等知らざるにより、或 は忘
るるにより、或 は名の多きによりて記憶せざる者は、爾 各人の 生 長と 姓
めい し おのおのひと そののは たいない し もつ みづか これ きおく
名とを知り、各 人を其 母の胎 内より知るを以て、親 ら之を記憶せよ、
けだししゅ なんぢ たすけ もの たすけ のぞみ もの のぞみ たいふう あ もの きゅう
蓋 主よ、爾 は 助 なき者の倚 助、望 なき者の冀 望、颱風に遭う者の 救
しゃ こうかい もの みなと やまい うれ もの いし なんぢみづか しゅうじん ため
者、航海する者の 埠、病 を患うる者の 醫師なり、爾 親ら衆 人の爲

おのおのそのもと ところ たま けだしかくじん し そのねがい そのいえ そのもとめ
 に、各 其 求むる 所 となり 給え、蓋 各 人を知り、其 願 と其 家と其 需
 し しゅ こ まち ちほう ききん えきびょう ぢしん すいなん かなん
 とを 知ればなり、主よ、此の都邑と地方とを、饑饉・疫 病 ・地震・水 難 ・火 難 ・
 けんなん がいこう ないらん すく たま
 劔 難 ・外 攻 ・内 亂より 救い 給え、)

司祭) 主よ、殊に 教 會を 司 る 尊 貴なる 我 等 の 全 日 本 の 府 主 教 セラフィムを 記 憶 し、
 かれ へいあん ぶなん そんき そうけん ちょうじゅ もの およ なんぢ しんじつ ことば ただ つた
 彼を 平 安 ・無 難 ・尊 貴 ・壮 健 ・長 壽 なる 者、及 び 爾 が 眞 實 の 言 を 正 しく 傳 う
 もの なんぢ せい きょうかい あた たま
 る 者 として、 爾 の 聖 なる 教 會 に 與 え 給 え、



司祭) (黙 誦 : 主よ、 爾 が 眞 實 の 言 を 正 しく 傳 う る 正 教 者 の 凡 の 主 教 品 を 記 憶
 しゅ なんぢ しんじつ ことば ただ つた せいきょうしゃ およそ しゅきょうひん きおく
 せよ、 主よ、 爾 が 慈 憐 の 多 きに 因 り て、 我 不 當 の 者 を も 記 憶 し、 我 に 凡 そ
 しゅ なんぢ じれん おお よ われふとう もの きおく われ およ
 自由 による 自由 によらざる 罪 過 を 赦 し 給 え、 我 が 諸 罪 に 因 り て、 爾 が 聖 神
 じゆう じゆう ざいか ゆる たま わ しよざい よ なんぢ せいしん
 の 恩 寵 の 奠 えたる 祭 品 に 臨 む を 遏 む る 勿 れ、 主よ、 司 祭 品、 ハリス トス に
 おんちょう そな さいひん のぞ とど なか しゅ しいひん
 因 る 輔 祭 品、 及 び 悉 くの 神 品 を 記 憶 し、 我 等 爾 の 聖 なる 祭 壇 に 環 り 立
 よ ほさいひん およ ことごと しんぴん きおく われら なんぢ せい さいだん めぐ た
 もの うち ひとり はぢう なか しゅ なんぢ じんじ もつ われら かえり
 つ 者 の 中、 一 を も 羞 を 承 け し む る 勿 れ、 主よ、 爾 の 仁 慈 を 以 て 我 等 を 顧
 なんぢ ゆたか おんけい もつ われら あらわ じゅんわ りえき な きこう
 み、 爾 の 豊 なる 恩 恵 を 以 て 我 等 に 現 れ、 順 和 に して 利 益 を 爲 す 氣 候 を
 われら たま ち ほうさく な かんう たま なんぢ おんたく もつ とし こうむ
 我 等 に 賜 い、 地 の 豊 作 を 爲 す 甘 雨 を 賜 い、 爾 の 温 澤 を 以 て 年 に 冠 ら し、
 なんぢ せいしん ちから もつ しよきょうかい ぶんき おさ いほうみん きょうぼう しづ
 爾 が 聖 神 の 力 を 以 て 諸 教 會 の 分 岐 を 治 め、 異 邦 民 の 驕 暴 を 鎮 め、
 しょいたん ぶんき すみやか やぶ たま わ かみ われらしゅうじん なんぢ くに い
 諸 異 端 の 紛 起 を 速 に 壊 り 給 え、 我 が 神 よ、 我 等 衆 人 を 爾 の 國 に 入 れ
 ひかり こひる こ あら なんぢ へいあん なんぢ あい われら たま けだし
 て、 光 の 子 晝 の 子 と 顯 わ し、 爾 の 平 安 と 爾 の 愛 と を 我 等 に 賜 え、 蓋
 なんぢ ばんじ もつ われら あた
 爾 は 萬 事 を 以 て 我 等 に 予 え り、)

司祭) 並 に 我 等 に、 口 を 一 に し 心 を 一 に して、 爾 父 と 子 と 聖 神 の 至 尊 至 嚴 の 名 を 讚

えいさんしょう たま いま いつ よよ
榮 讚 頌 するを賜え、今も何時も世に、



司祭) ねがわ おおい かみ わ きゆうしゆ あわれみ なんぢしゆうじん とも あ
願 くは 大 なる神、我が 救 主イイスハリストスの 憐 は、爾 衆 人と偕に在ら

んことを、



【 増聯禱 】

司祭) われらしよせいじん きおく またまたあんわ しゅ いの
我 等 諸 聖 人を記憶して、復 又 安和にして主 に 禱 らん、



司祭) すで けん およ せい とうと さいひん ため しゅ いの
已 に 獻 ぜられ 及び 聖 に せられし 尊 き 祭 品 の 爲 に 主 に 禱 らん、



司祭) ^{ひと あい わ かみ これ そのせい てんじょう むけい さいだん お ぞくしん けいこう} 人を愛する我が神が、之を其聖なる天上の無形の祭壇に置き、屬神の馨香と

^{う われら むく しんみょう おんちよう せいしん たまもの くだ ため いの} して享け、我等に報いて、神妙の恩寵と聖神の賜とを降すが爲に禱らん、

しゅ あわれ めよ。
主 憐

司祭) ^{われら もろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの} 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、

しゅ あわれ めよ。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あわれ めよ。
主 憐

司祭) ^{こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと} 此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、

しゅ たま えよ。
主 賜

司祭) ^{へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしゃ たま しゅ もと} 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む

しゅ 主 た 賜 ま え よ 。

司祭) われら つみ あやまち なた ゆる しゅ もと
我等の罪と 過 とを宥め赦さんことを主に求む、

しゅ 主 た 賜 ま え よ 。

司祭) われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと
我等の 靈 に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、

しゅ 主 た 賜 ま え よ 。

司祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、

しゅ 主 た 賜 ま え よ 。

司祭) われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ
我等の生命の 終 がハリストティアニンに適い、疾 なく、耻なく、平安なること、及び
ハリストスの 畏るべき 審判に於て宜しき 對 をなすを賜わんことを求む、



司祭) ^{しん どういつ せいしん たいごう もと われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび} 信の同一と聖神の體合とを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、并
^{ことごと われら いのち もつ かみ いたく} に 悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) (^{ひと あい しゅさい われら わ ことごと いのち のぞみ なんぢ ゆだ ねが} 黙誦：人を愛する主宰よ、我等は我が 悉くの生命と 望とを爾に委ねて、願
^{いの せつ もと われら きよ りょうしん もつ なんぢ てんじょう おそ きみつ} い祈り切に求む、我等に、淨き良心を以て、爾が天上の畏るべき機密、
^{こ せい ぞくしん えん あづか たま こ つみ ゆるし あやまち надめ} 此の聖せられたる屬神の筵に 與るを賜いて、此れが罪の赦、過の宥、
^{せいしん たいごう てんごく しぎょう なんぢ お ゆうかん しんあんあるい ていざい} 聖神の體合、天國の嗣業、爾に於ける勇敢となりて、審案或は定罪
^{いた たま} とならざるを致させ給え、)

【 天主經 】

司祭) ^{しゅさい われら いさみ もつ つみ え あえ なんぢてん かみちち よ い たま} 主宰よ、我等に 勇を以て、罪を獲ずして、敢て爾天の神父を籲びて言うを賜え、



ねがわくはなんぢのなはせいとせられ、なんぢの
願 爾 名 聖 爾

くにはきたり、なんぢのむねはてんにおこな
國 來 爾 旨 天 行

わるるがごとくちにもおこなわれん、わ我
る 如 地 も 行 行 我

がにちようのかてをこんにちわれらにあたえた給
日 用 の 糧 て を 今日 我 等 に 與 た 給

まえ、われらにおいめあるものをわ我
ま え 、 わ れ ら に お い め あ る も の を わ 我

れらゆるすがごとく、われらのおい
赦 る す が ご と く 、 わ れ ら の お い

めをゆ_救るし_給たまえ、われ_我ら_等をい_誘ざない

にみ_導ち_導び_導か_導ず、な_猶お_猶われ_我ら_等をき_凶よ_凶う_凶あ_悪悪

く_救よ_救り_救す_救く_救い_救たま_給え、

司祭) ^{けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ} 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、

ア ミ ン。

司祭) ^{しゅうじん へいあん} 衆人に平安、

なん_爾ぢ_等のし_神んにも。

司祭) ^{なんぢら こうべ しゅ かが} 爾等の首を主に屈めよ、



司祭) (黙誦: ^{み べ}見る可からざる王、^{おう}其量り難き能^{がた}力を以て萬有を畫定し、^{そのじれん}其慈憐の多^{おお}
^{もつ ばんぶつ む ゆう}きを以て萬物を無より有となしし主よ、^{しゅ われらなんぢ かんしゃ}我等爾に感謝す、^{しゅさい なんぢ}主宰よ、爾
^{みづか なんぢ こうべ かが}親ら爾に首を屈めし者を天より顧み給え、^{もの てん かえり たま けだしけつにく かが}蓋血肉に屈めしに非ず、^{あら}
^{すなわちなんぢおそ}乃爾畏るべき神に屈めり、^{かみ かが ゆえ しゅさい なんぢ ここ そな}故に主宰よ、爾は此に奠えたる者を、^{もの われ}我
^{らしゅうじん ぜん ため かくじん ひつよう おう ひとし わか こうかい}等衆人の善の爲に、各人の必要に應じて等く頌ち、航海する者と偕
^{こうかい りょこう}に航海し、^{もの とも りょこう れいたい いし やまい うれ}旅行する者と偕に旅行し、靈體の醫師として、病を患うる者
^{いや たま}を醫し給え、)

司祭) ^{なんぢ どくせいし おんちよう じれん じんあい よ}爾が獨生子の恩寵と慈憐と仁愛とに因りてなり、^{なんぢ かれ しせいしぜん}爾は彼と至聖至善にして生命
^{ほどこ なんぢ しん とも さんよう いま いつ よよ}を施す爾の神と偕に讚揚せらる、今も何時も世に



司祭) (黙誦: ^{しゅ}主イイススハリストス我等の神よ、^{われら かみ なんぢ せい すまい なんぢ くに こうえい ほう}爾の聖なる住所と爾が國の光榮の寶
^{ざ かえり たま うえ ちち とも ざ ここ み われら とも おもの}座より眷み給え、上には父と偕に坐し、此には見えずして我等と偕に居る者よ、
^{きた われら せい なんぢ けんのう て もつ なんぢ しじょう たい しそん ち}來りて我等を聖にし、爾の權能の手を以て、爾が至淨の體と至尊の血と
^{われら さづ またわれら もつ しゅうじん さづ たま}を我等に授け、又我等を以て衆人に授け給え、
^{かみ われざいにん きよ われ あわれ たま かみ われざいにん きよ われ あわれ}神よ我罪人を淨めて、我を憐み給え、神よ我罪人を淨めて、我を憐
^{たま かみ われざいにん きよ われ あわれ たま}み給え、神よ我罪人を淨めて、我を憐み給え、)

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、^{せい} 聖なる物 ^{もの} は ^{せい} 聖なる人 ^{ひと} に、

せいなるはただひとり、しゅなるはただ
聖 唯 獨 主 唯

ひとり、かみちちのこうえいをあらわす
獨

イイススハリストスなり、アミン。

司祭) (黙誦：^{かみ} 神の ^{こひつじ} 羔 ^さ は ^{わか} 剖かれ分たる、^{かれ} 彼は ^さ 剖かれて ^{ぶんり} 分離せず、^{つね} 恒に ^{くら} 食われて ^{なが} 永く ^つ 盡き
ず、^{すなわち} 乃 ^{もの} 領くる者 ^{せい} を聖にす、)

※信徒領聖まで、聖歌指揮者の指示に随って歌うこと。

(奉事規程が指定しているのは『主日領聖詞』、すなわち第148聖詠の第一節を繰り返し歌い、間に2節以下を句としてアンティフォン形式で歌う。若しくは誦經する。

本来は神品領聖と信徒領聖に区別はないので、同じ領聖詞を使う。日本正教会では通年「大パスハ領聖詞」を歌うことが多い。

日本正教会では神品領聖時に『主日領聖詞』に代えて、早課イルモス(其の週の調、又は生神女のカタワシヤ等)、スティヒラ等を歌うことが多いが、これに奉事規程上の根拠はない。

歌えるものがない場合は、聖詠經を誦經しても良い。)

【 領聖詞 第148 聖詠 】

て ん よ り し ゅ を ほ め あ げ よ い と た か
天 ん よ り し ゅ を ほ め あ げ よ い と た か
き に か れ を ほ め あ げ よ
き に か れ を ほ め あ げ よ

- 句) そのことごと てんし かれ ほ あ そのことごと ぐん かれ ほ あ
其 悉 くの天使よ、彼を讃め揚げよ、其 悉 くの軍よ、彼を讃め揚げよ。
- 句) ひ つき かれ ほ あ ことごと ひか ほし かれ ほ あ
日と月よ、彼を讃め揚げよ、 悉 くの光る星よ、彼を讃め揚げよ。
- 句) しよてん てん てん うえ みづ かれ ほ あ
諸 天の天と天より上なる水よ、彼を讃め揚げよ。
- 句) しゅ な ほ あ けだしかれい すなわちな めい すなわちつく かれ
主の名を讃め揚ぐべし、 蓋 彼言いたれば、 即 成り、命じたれば、 即 造られたり、彼
これ た よよ いた のり あた これ こ
は之を立てて世世に至らしめ、 則を與えて之を躐えざらしめん。
- 句) ち しゅ ほ あ おおうお ことごと ふち ひ あられ ゆき きり しゅ ことば したが ぼうふう
地より主を讃め揚げよ、大 魚と 悉 くの淵、火と 霰、雪と霧、主の言に従う暴風、
やま ことごと おか くだもの き ことごと はくこうぼく やじゅう もるもろ かちく は もの と
山と 悉 くの陵、 果 の樹と 悉 くの栢香木、野 獣と 諸 の家畜、匍う物と飛
とり ち しよおう ばんみん ぼくはく ち しよゆうし しようねん しよぢよ おきな わらべ しゅ な
ぶ鳥、地の諸王と萬民、牧伯と地の諸有司、少 年と處女、翁と童は、主の名
ほ あ けだただそのな たか あ そのこうえい てんち あまね
を讃め揚ぐべし、 蓋 惟 其名は高く擧げられ、其光 榮は天地に 偏 し。
- 句) かれ そのたみ つの たか そのしよせいじん しよし かれ した たみ さかえ たか
彼は其民の角を高くし、其 諸 聖人、イスライリの諸子、彼に親しき民の 榮 を高く
せり。

アリル イヤアリル イヤアリ

ル イ ヤ

【 信徒領聖 】

司祭) ^{かみ おそ}神を畏るる ^{こころ しん}心と信とを ^{もつ ちか}以て ^{きた}近づき來れ、

しゅのなによりてきたるものはあがめほめら
主の名に因りて來る者は崇がめほ讚めら

るしゅはかみなりわれらをてらせり
主は神我れ等を照らせり

全員) ^{しゅ われしん}主よ我信じ、^{かう みと}且つ承け認めて、^{なんぢ じつ}爾を實にハリストス ^{せいかつ かみ}生活の神の子、^{こ ざいにん}罪人を救うが

^{ため よ}爲に ^{きた もの}世に來りし者と ^{しゅうざいにん}なす、^{うちわれだいいち}衆罪人の中我 ^{またしん}第一なり、^こ又信ず、^{すなわちなんぢ}此れは乃爾 ^しが至

^{じゆう たい}淨の體、^こ此れは乃爾 ^{しそん ち}が至尊の血なりと、^{ゆえ なんぢ}故に爾に ^{いの}祈る、^{われ あわれ}我を憐み、^{わ じゆう}我が自由

^{じゆう}と自由ならずして、^{ことば おこない}言と行にて、^{し し}知ると知らずして、^{おか しょざい}犯しし諸罪を ^{ゆる たま}赦し給え、^{ならび}並

^{われ ていざい}に我に定罪なく、^{なんぢ しじゆう}爾が至淨なる機密を ^{きみつ う}領けて、^{つみ ゆるし}罪の赦しと ^{えいせい}永生とを ^{え いた}得るを致させ

^{たま}給え、アミン。

^{かみ こ}神の子よ、^{いまわれ なんぢ}今我を爾が ^{きみつ えん}機密の筵に ^{あづか}與る者として ^{い たま}容れ給え、^{けだしわれなんぢ}蓋我爾の ^{あだ き}仇に機

みつ つ なんぢ ごと せつぶん な すなわちうとう ごと なんぢ う
 密を告げざらん、また 爾 にイウダの如き接 吻を爲さざらん、 乃 右盗の如く 爾 を承
 け認めて曰う、主よ、 爾 の國に於て我を記憶せよと、主よ、祈る 爾 の聖なる機密を
 う 領くるは、我が爲に 審案 或 は定罪とならず、すなわち 靈體の 醫 とならんことを、

【 (大パスハ) 領聖詞 】

※ 全員が領聖し畢り、元の位置に戻るまで繰り返す。



司祭) (黙誦：ハリストスの復活を見て、聖なる主イイスス・獨罪なき者を拜むべし、ハ
 リストスよ、我等 爾 の十字架を拜み、 爾 の聖なる復活を歌い讃む、 爾
 われら なんぢ じゅうじか おが なんぢ せい ふくかつ うた ほ なんぢ
 は我等の神なればなり、 爾 の外他の神を知らず、唯 爾 の名を稱う、信者よ、
 われら かみ なんぢ ほかた かみ し ただなんぢ な と な しんじゃ
 皆 來りてハリストスの聖なる復活を拜むべし、 十字架にて 喜 は全世界に
 みなきた せい ふくかつ おが じゅうじか よろこび ぜんせかい
 のぞ われらつね しゅ ほ あ そのふくかつ あが うた しゅ じゅうじか
 臨めばなり、我等恒に主を讃め揚げて、其復活を崇め歌わん、主は十字架
 くぎ しの し もつ し ほろぼ
 に釘うたるるを忍びて、死を以て死を 亡 ししによる、
 あらた ひか ひか しゅ こうえいなんぢ かがや
 新なるイエルサリムよ、光り光れよ、主の光榮 爾 に輝けばなり、シオン
 よ、今祝いて 樂めよ、 爾 も 潔き生神女よ、 爾 が生みし主の復活を
 いまいわ たのし なんぢ いさぎよ しょうしんぢよ なんぢ う しゅ ふくかつ
 喜び給え、
 よろこ たま
 嗚呼 大にして至聖なるパスハ・ハリストスよ、嗚呼智慧と神の言と能力よ、 爾
 ああおおい しせい ああちえ かみ ことば ちから なんぢ
 が國の暮れざる日に於て、我等に猶 親く 爾 を領けさせ給え
 く に く ひ おい われら なおしたし なんぢ う たま
 しゅ なんぢ しそん ち もつ なんぢ しょせいじん きとう よ ここ きおく
 主よ、 爾 が至尊の血を以て、 爾 が諸聖人の祈禱に因りて、此に記憶せら

もの しょざい あら たま
れし者の諸罪を滌い給え、

ひと あい しゅさい わ たましい おんしゅ われら こ ひ おい なんぢ てん
人を愛する主宰、我が 靈 の恩主よ、我等に、此の日に於ても、 爾 が天
じょう ふし きみつ う たま なんぢ かんしゃ われら みち なお われら
上の不死の機密を領けさせ給いしを 爾 に感謝す、我等の途を直くし、我等
しゅうじん なんぢ おそ おそ けんご われら いのち まも われら あゆみ かた
衆人を 爾 を畏るるの畏れに堅固にし、我等の生命を護り、我等の歩 を固
たま こうえい しょうしんぢょ えいていどうぢょ およ なんぢ しょせいじん いのり
め給え、光榮なる 生 神女・永貞童女マリヤ及び 爾 が諸聖人の祈 と
ねがい よ
願 とに因りてなり、)

※ 全員が元の位置に戻って歌う準備ができてから「アレルイヤ」を歌う。

Musical score for the hymn 'Ari-ri-ya'. It consists of two staves: a treble clef staff and a bass clef staff. The melody is written in the treble staff, and the bass line is in the bass staff. The lyrics are written below the notes: ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ.

司祭) ^{かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ}
神よ、 爾 の民を救い、及び 爾 の嗣業に福を降せ、

Musical score for the hymn 'We have seen the glory of heaven'. It consists of two staves: a treble clef staff and a bass clef staff. The melody is written in the treble staff, and the bass line is in the bass staff. The lyrics are written below the notes: わ れ ら す で に ま こ と の ひ か り を み 観 て ん の
我 等 已 だ に 眞 事 の 光 輝 を 観 天

Musical score for the hymn 'The Holy Spirit receives us'. It consists of two staves: a treble clef staff and a bass clef staff. The melody is written in the treble staff, and the bass line is in the bass staff. The lyrics are written below the notes: せ い し ん を う け た だ し き し ん を え 得 て
聖 霊 を 受 け 正 信 を 得 て

Musical score for the hymn 'We thank the Holy Trinity'. It consists of two staves: a treble clef staff and a bass clef staff. The melody is written in the treble staff, and the bass line is in the bass staff. The lyrics are written below the notes: わ か れ ぎ る せ い さんしや を お が む か れ わ れ
分 かる 聖 三者 を 拜 む 彼 我

ら を す く い た ま え ば な り
等 を 救 いた 給 え ば な り

司祭) (黙誦：神よ、願 くは 爾 は 諸 天 の 上 に 擧 げ ら れ、 爾 の 光 榮 は 全 地 を 蔽 わ ん、 我
 ら か み つね あ が ほ
 等 の 神 は 恒 に 崇 め 讃 め ら る、)

司祭) い ま い つ よ よ
 今 も 何 時 も 世 世 に、

ア ミ ン

し ゅ よ 、 ね が わ く は わ が く ち は さ ん び に み て ら
 主 願 我 が 口 讃 美 満

れ て 、 わ れ ら な ん ち の こ 光 う え い を う た わ ん、
 我 等 爾 の 光 榮 を 歌

な ん ち わ れ ら に 、 し ん せ い に し て ふ し な る い 生
 爾 我 等 に 神 聖 に し て 不 死 なる 生

のちをほどこす なんぢのせい きみつを
命 施 爾 聖 機 密

うくるをゆるせばなり、いのるわれらを
領 許 祈 我 等

なんぢのせい せい にまもり、しゅうじつなんぢ
爾 成 聖 護 終 日 爾

のぎをならわしめたまえ、
義 習 給 え

ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ

司祭) ^{つし た しんせい しじょう ふし いのち ほどこ てんじょう おそ せい}
 謹みて立て、神聖・至淨・不死にして生命を施す天上の畏るべきハリストスの聖
^{きみつ う よろ しゅ かんしゃ}
 機密を領けて、宜しく主に感謝すべし、

しゅ あ わ れ め よ しゅ あ わ れ め よ
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも}
神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救い憐み護れよ、

司祭) ^{こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい もと われらおのれ みおよ たがい}
此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを求めて、我等己の身及び互に

^{おのおの み もつ ならび ことごと われら いのち もつ かみ いたく}
各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ な んぢ に
主

司祭) ^{けだしなんぢ われら せいせい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ}
蓋爾は我等の成聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世

に、

ア ミ ン ア ミ ン

司祭) ^{へいあん い}
平安にして出づべし、

しゅ の な に よ り て
主 名 因

司祭) ^{しゅ いの}
主に禱らん、



司祭) なんぢ さんよう もの ふく くだ およ なんぢ たの もの せい しゅ なんぢ たみ すく
爾を讃揚する者に福を降し、及び爾を恃む者を聖にする主よ、爾の民を救

い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會の充満を守り、爾が堂の美なるを

愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力を以て彼等を光榮し、及び我等爾を恃む

ものを遺す勿れ、爾の世界と爾の諸教會と諸司祭と、我が國の天皇及び國を

司る者及び爾の衆人に平安を賜え、蓋凡の善なる施、凡の全備なる

賜は、上より、爾光明の父より降るなり、我等光榮・感謝・伏拜を爾父と

子と聖神に獻ず、今も何時も世に、



がめほめられていまよりよよ世にいたらん

ねがわくはしゅのなはあがめほめられていまよ

りよよ世にいたらん

誦經) われいつ とき しゅ ほ あ かれ ほ つね わ くち あ わ たましい しゅ
 我 何れの 時にも 主を 讃め 揚げん、 彼を 讃むるは 恒に 我が 口に 在り、 我が 靈 は 主
 もつ ほこ おんじゅう もの き たの われ とも しゅ どうと とも かれ な あが
 を 以て 誇らん、 温 柔 なる 者は 聞きて 樂しまん。 我と 偕に 主を 尊め、 偕に 彼の 名を 崇
 ほ われかつ しゅ たづ かれ われ き い わ すべ あやう われ まぬか
 め 讃めん。 我 嘗て 主を 尋ねしに、 彼は 我に 聆き 納れて、 我が 都ての 危きより 我を 免
 たま め あ かれ あお もの たら かれら おもて はぢ う これ
 れしめ 給えり。 目を 擧げて 彼を 仰ぐ 者は 照されたり、 彼等の 面は 愧を受けざらん。 此の
 まづ ものよ しゅ き い これ そのことごと かんなん すく しゅ つかい しゅ
 貧しき 者呼びしに、 主は 聆き 納れて、 之を 其 悉く の 艱難より 救えり。 主の 使は 主
 おそ もの めぐ まも かれら たす あぢわ しゅ いか じんじ み かれ たの
 を 畏るる 者を 環り 衛りて、 彼等を 援く。 味えよ、 主の 如何に 仁慈なるを見ん、 彼を 恃
 ひと さいわい およ しゅ せいじん しゅ おそ けだしかれ おそ もの とぼ
 む人は 福なり。 凡そ 主の 聖人よ、 主を 畏れよ、 蓋 彼を 畏るる 者は 乏しきことな
 わか しし とぼ う ただしゅ たづ もの なん こうふく か
 し。 少き 獅子は 乏しくして 餓え、 唯 主を 尋ぬる 者は 何の 幸福にも 缺くるなし。

司祭) (黙誦： みづか ほうりつ しょよげんしゃ じょうまん ちち ていせい ことごと じょうまん
 親ら 法律と 諸預言者との 成満にして、 父の 定制を 悉く 成満せ
 わ かみ つね われら こころ よろこび たのしみ じょうまん たま
 しハリストス我が 神よ、 常に 我等の 心を 喜と 樂とに 成満せしめ 給え、
 いま いつ よよ
 今も 何時も 世世に、)

司祭) ねがわ しゅ こうふく そのおんちよう じんあい よ つね なんぢら あ いま いつ
 願くは 主の 降福は、 其 恩寵と 仁愛とに 因りて 常に 爾等に 在らん、 今も 何時も

よよ
世世に、



※ もし永眠者記憶を続けて行う場合はP53【永眠者の爲の^{リテイヤ}熱衷祈祷】に飛ぶ。

【 通常の終結 】

司祭) ハリストス神我等の^{かみわれら たのみ}侍よ、^{こうえい なんぢ き}光榮は爾に歸す、^{こうえい なんぢ き}光榮は爾に歸す、



司祭) 死より^し復^{ふくかつ}活^{かつ}せしハリストス我等の^{われら}眞^{まこと}の神^{かみ}は、其^{その}至^{しじょう}淨^{じやう}なる母^{はは}、光^{こうえい}榮^{えい}にして讚^{さんび}美^びたる

聖^{せい}使^し徒^と、我^{われら}等^らの聖^{せい}神^{しん}父^ぶカッパドキヤの^{だいしゅきやうせいだい}カイサリヤの大^{だい}主^{しゅ}教^{きやう}聖^{せい}大^{だい}ヴァシリイ、

克^{こく}肖^{しやう}捧^{ほう}神^{しん}なる我^{わが}諸^{しよ}神^{しん}父^ぶ、(某) 及^{およ}び諸^{しよ}聖^{せい}人^{じん}の祈^{きとう}禱^{たう}に因^{より}て我^{われら}等^らを憐^{あわれ}み給^{たま}わん。

善^{ぜん}にして人^{ひと}を愛^{あい}する主^{しゅ}なればなり、

アミン。

【 萬壽詞 】

かみよわがくにのてんの皇 う および
神 我 國 天 皇 及 び

くにをつかさどるもの
國

われらのふしゅきょうセラフィム、 およびこごと
我 等 府 主 教 及 び 悉 ごと

くのせいきょうのハリストイアニンら を いくとせ
正 教 幾 と 歳

Musical score for a prayer. The score is written on two staves, a treble clef staff on top and a bass clef staff on the bottom. The key signature has one flat (B-flat). The melody is simple, consisting of quarter and half notes. The lyrics are written below the treble staff.

に も ま も り た ま え
護 給

(祈祷終了、十字架接吻)

【 幾歳も 】

The image displays a musical score for the hymn '幾歳も' (Ikusai mo). It consists of three systems of music, each with a vocal line and a piano accompaniment. The vocal line is written in a soprano clef, and the piano accompaniment is in a bass clef. The lyrics are written in Japanese characters below the notes. The first system contains the first two lines of the hymn. The second system contains the next two lines. The third system contains the final line of the hymn, which ends with a double bar line and repeat dots. The piano accompaniment features a steady bass line and chords that support the vocal melody.

い 幾 く と 歳 せ も い 幾 く と 歳 せ も い 幾 く
と 歳 せ も い 幾 く と 歳 せ も い 幾 く と 歳 せ も
い 幾 く と 歳 せ も

【 永眠者の爲の熱衷祈禱 ^{リテイヤ} 】

ひ と を あ い す る き ゆ う せ 世 い し ゆ 主 よ し せ し ぎ じん 人
 人 と を 愛 す る 救 世 主 よ し 死 し 義 人

の た ま し い と と も に なん ぢ が ぼ く ひ の た ま
 の 霊 た ま し い と 借 も に なん ぢ が 僕 く ひ 婢 の 霊 ま

しい を や す ン ぜ し め て か れ ら を なん ぢ に あ 在
 しい を や 安 す ン ぜ し め て か 彼 れ 等 を なん ぢ に あ 在

る ふ く ら く の い の ち に ま も り た ま
 る 福 く ら 樂 の い 生 の ち 命 に ま 護 も り た 給 ま

え

し ゆ よ なん ぢ が し よ せ い じん の あん そ く す る と ころ
 主 よ なん ぢ が し よ 諸 聖 人 の あん そ く す る と 處

に なんぢが ぼくひの たましいを やすんぜ しめ た給
爾 僕 婢 靈 安

ま え なんぢ ひと りひとを あいする しゆなれば
爾 獨 人 愛 主

な り

こ う え い は ち ち と こ と せ い しん に き 歸 す
光 榮 い は ち ち と こ と 聖 い しん に き 歸 す

なんぢ は ぢご く に くだりて つながれし もの の く 鎖
爾 地 獄 に 降 繋 がれし もの の く 鎖

さり を と き た る か み な り み づ か ら なんぢ
釋 神 親 づ か ら なんぢ
爾

が ぼ く ひ の た ま し い を や す ン ぜ し め た ま
 僕 女 子 の 霊 ま し い を 安 ん ぜ し め た 給

え

い ま も い つ も よ よ に ア ミ ン
 今 も 何 時 も 世 世 に ア ミ ン

ひ と り い さ ぎ よ く き ず な き ど う て い ぢ ゃ た ね な
 獨 り い 潔 さ ぎ よ く き ず な き ど う て い ぢ ゃ た ね な

く し て か み を う み し も の よ か 彼 れ ら の た ま
 神 様 を 生 む 者 の よ か 彼 れ ら の 霊 た ま

し い の す く わ れ ん こ と を い の り た ま え
 救 済 の 事 を 祈 り 給 た ま え

【 重聯禱 】

司祭) ^{かみ なんぢ おおい あわれみ より われら あわれ なんぢ いの き い あわれ} 神よ、爾の大なる憐に因て我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

司祭) ^{またねむ かみ ぼくひ たましい あんそく ため およ かれら およ じゆう じゆう} 又寝りし神の僕婢(某)の靈の安息の爲、及び彼等に凡そ自由と自由ならざ

^{つみ ゆる ため いの} る罪の赦されんが爲に禱る、

司祭) ^{しゅかみ かれら たましい しょぎじん あんそく ところ い たま いの} 主神が彼等の靈を諸義人の安息する處に入れ給わんことを禱る、

司祭) ^{かれら かみ あわれみ てんごく しょざい ゆるし たま わがし おうおよ} 彼等に神の憐と天國と諸罪の赦とを賜わんことを、ハリストス我死せざる王及

^{かみ ねが} び神に願う、

司祭) ^{しゅ いの} 主に禱らん、



司祭) もろもろ れいしん もろもろ にくたい かみ し ほろ あくま むなし なんぢ せかい いのち
 諸の靈神と諸の肉體との神、死を亡ぼし悪魔を虚くし、爾の世界に生命

たま しゅ なんぢみづか ねむ なんぢ ぼくひ たましい ひか ところ しげ くさば
 を賜いし主よ、爾親ら寝りし爾の僕婢(某)の靈を光る處、茂き草場、

へいあん ところ やまい かなしみ なげき とお ところ あんそく ぜん ひと あい
 平安の處、病と悲と歎との遠ざかる處に安息せしめ、善にして人を愛する

かみ より かれら あるい ことば あるい おこない あるい おもい おか ことごと つみ ゆる
 神なるに因て彼等が或は言、或は行、或は思にて犯しし悉くの罪を赦

たま けだしひとひとり い つみ おこな もの ただなんぢ つみ なんぢ ぎ えいえん
 し給え。蓋人一も生きて罪を行わざる者なし、唯爾は罪なし、爾の義は永遠

ぎ なんぢ ことば しんじつ けだし われら かみ なんぢ ねむ なんぢ ぼくひ
 の義、爾の言は眞實なり。蓋ハリストス我等の神よ、爾は寝りし爾の僕婢

(某)の復活と生命と安息なり。我等光榮を爾と爾の無原の父と至聖至善にし

いのち ほどこ なんぢ しん けん いま いつ よよ
 て生命を施す爾の神とに獻ず、今も何時も世に、



【 永眠者の爲のコンダク 】



を しよ せ い じ ん と と も に や ま い
諸 聖 い 人 と 借 も に 疾 ま い

も か な し み も な げ き も な く た だ お 終
悲 な し み も な げ き も な く た だ お 終

わ り な き い の ち の あ る と こ ろ に や す ん
な き い の ち の あ る と こ ろ に や す ん

ぜ し め た ま え
給

【 終 結 】

司祭) ^{かみわれら たのみ} ハリストス神我等の ^{こうえい なんぢ き} 恃よ、^{こうえい なんぢ き} 光榮は爾に歸す、^{こうえい なんぢ き} 光榮は爾に歸す、

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
光 榮 い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も

い つ も よ よ に ア ミ ン しゅ あ わ れ め しゅ あ わ れ
何 時 も 世 世 に ア ミ ン 主 憐 れ 主 憐

め しゅ あ わ れ め よ 、 ふ く を く だ せ
主 憐 れ め よ 、 福 を 降

司祭) ^{し ふくかつ い もの し もの そのぜんのう て たも たま われら まこと}死より復活し、生ける者と死せし者を其全能の手に保ち給うハリストス我等の眞の

^{かみ そのしじょう はは こうえい さんび せいしと こくしょうほうしん わがしよしんぶ}神は、其至浄なる母、光栄にして讚美たる聖使徒、克肖捧神なる我諸神父、

(某) ^{およ しよせいじん きとう より ねむ ぼくひ たましい しよぎじん すまい い}及び諸聖人の祈禱に因て、寝りし僕婢(某)の靈を諸義人の住所に入れ、

^{ふところ やす しよぎじん れつ くわ およ われら あわれ たま ぜん}アブラアムの懐に安んぜしめ、諸義人の列に加え、及び我等を憐み給わん。善に

^{ひと あい しゅ}して人を愛する主なればなり、

ア ミ ン。

司祭) ^{しゅ なんぢ ぼくひ さいわい ねむり えいえん あんそく あた かれら えいえん きおく}主よ、爾の僕婢(某)の福なる寝に永遠の安息を與え、彼等に永遠の記憶

^{な たま}を爲し給え、

え い え んの き お 憶 く 、 え い え んの き 憶
永 い 遠 んの き お 憶 く 、 遠 い 遠 んの き 憶

お憶 ぐ、えい え遠 んの き記 お憶 ぐ。

【 萬壽詞 】

か 神 み よ わ 我 が 國 に の てん の 皇 う お 及 よ び

く に を つ か さ ど る も の
國

わ れ ら の ふ し ゆ き よ う セ ラ フィ ム、 お よ び こ と ご と
我 等 府 主 教

く の せ い き よ う の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を い く と せ
正 教

に も ま も り た ま え
護 給

The image shows a musical score for the Japanese phrase "にもまもりたまえ" (Nimo mamoritamae). The score is written on two staves, a treble clef on top and a bass clef on the bottom. The key signature has one flat (B-flat). The melody is simple, with notes corresponding to the syllables of the text. The lyrics are written below the notes, with "護" (go) under "ま" and "給" (kyū) under "り".

(祈祷終了、十字架接吻)

りょうせいかんしゃしゅくぶん
【 領 聖 感 謝 祝 文 】

かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き
神や光 榮は 爾 に歸す、神や光 榮は 爾 に歸す、神や光 榮は 爾 に歸す、

【 第一祝文 】 しゅわ かみ なんぢわれざいにん す なおなんぢ せい きみつ あづか
主我が神や、 爾 我 罪 人を棄てずして、 尚 爾 の 聖なる機密に 與 る

もの いた たま なんぢ かんしゃ われた もの なんぢ しじょう てん たまもの う
者と致させ給うを 爾 に感謝す、我堪えざる者に 爾 が至 淨なる天の 賜を受く

ゆる たま なんぢ かんしゃ しゅさい ひと あい しゅ われら ため し ふくかつ
るを容し給うを 爾 に感謝す、主 宰・人を愛する主、我等の爲に死して復 活し、

われ たましい からだ おん あた これ せい ため われら こ おそ べ いのち
我が 靈 と 體 とに恩を與え、之を聖にするが爲に、我等に此の恐る可くして生命を

ほどこ きみつ たま もの もと こ きみつ われ たましい からだ いや およそ てき
施す機密を賜いし者や、求む此の機密は、我にも 靈 と 體 とを癒し、凡の敵

がい か われ ころ め あきら われ たましい ちから へいあん はぢ え しん
の害を驅り、我が 心 の目を 明かにし、我が 靈 の力を平安にし、耻を得ざる信

いつわり あい えいち み なんぢ いましめ まも なんぢ しんせい おんちよう
とし、偽 なき愛とし、睿智を充たし、爾 の 誠 を守らしめ、爾 が神聖の恩 寵

ま なんぢ くに つ もの え たま われ か ごと こ きみつ
を益し、 爾 の國を嗣がしむる者となるを得せしめ給え、我は此くの如く、是の機密に

なんぢ せいせい まも つね なんぢ おんちよう おも またおの ため せいかつ すなわち
て 爾 の成聖に護られ、常に 爾 の恩 寵を思い、復己が爲に生活せず、 乃

なんぢわ しゅさいおよ おんしゅ ため せいかつ もつ えいせい のぞみ いた こ よ はな
爾 我が主 宰及び恩主の爲に生活し、以て永生の 望を懐き、此の世を離れて、

えいえん いこい か しゅく もの た こえ およ なんぢ かんばせ い つく びぜん み
永遠の息、彼の 祝する者の絶えざる聲、及び 爾 が 顔の言い盡されぬ美善を見

もの かぎ たのしみ ところ いた けだし わ かみ なんぢ なんぢ あい
る者の限りなき 樂の處に至らん、蓋 ハリストス我が神や、 爾は 爾を愛する

もの まこと のぞみ い つく たのしみ およ ぞう う もの なんぢ よよ ほ うた
者の眞の 望と言い盡されぬ 樂なり、凡そ造を受けし者は 爾を世世に讃め歌う、

「アミン」

【第二祝文 聖大ワシリイの原文】 しゅさい かみ ばんせい おう ばんぶつ ぞうせいしゃ
主 宰ハリストス神、 萬世の王、 萬物の造成者や、

およ われ たま ところ しょぜん かついのち ほどこ しじょう なんぢ きみつ う たま
凡そ我に賜いし 所の諸善、且生命を 施す至 淨なる 爾の機密を領けさせ給い

なんぢ かんしゃ またなんぢ いの ぜん え ひと あい しゅ われ なんぢ おおい した
しを 爾に感謝す、又 爾に祈る、善にして人を愛する主や、我を 爾が 庇の下

なんぢ つばさ かげ まも われ いき た いた まで いさぎよ りょうしん もつ
に、 爾が 翼の蔭に護り、我に呼吸の絶えんとするに至る迄、 潔き良心を以て、

とうぜん なんぢ せいたいせいけつ う もつ つみ ゆるし えいせい う いた たま けだし
當然に 爾の聖體聖血を領け、以て罪の赦と永生とを得るを致させ給え、 蓋

なんぢ いのち かけて せいせい いづみ しょぜん たま しゅ われらなんぢ ちち せいしん こうえい
爾は生命の糧、成聖の泉、諸善を賜う主なり、我等 爾と父と聖神とに光 榮

けん いま いつ よよ
を獻ず、今も何時も世世に、「アミン」

【 第三祝文 聖シメヨン「メタフラスト」の原詩 】 わ ぞうせいしゅ あまん おのれ み かけて
我が造成主、甘じて己の身を糧と

われ あた ひ ふとうしゃ や もの もと われ や なか すなわちわ ひやくたいしよせつしん
して我に與え、火にして不當者を焚く者や、求む我を焚く母れ、乃 吾が百體諸節心

ぶく い わ しょざい いばら や たましい きよ おもい せい すじ ほね かた ごかん
腹に入り、吾が諸罪の棘を焚き、靈を淨め、思を聖にし、筋と骨とを固め、五官を

あきら わ ぜんしん なんぢ おそ おそれ くぎ つね われ おお われ たも われ たましい
明かにし、吾が全身を、爾を畏るる畏に釘うち、常に我を庇い、我を保ち、我を靈

がい もろもろ おこない ことば まも われ きよ われ あら われ かざ われ おさ われ
を害する諸の行と言とより護り、我を淨め、我を滌い、我を飾り、我を治め、我

ひら われ てら わ またつみ すまい ひとりなんぢ せいしん すまい あらわ およそ
を啓き、我を照し、我が復罪の住所たらずして、獨爾が聖神の住所たるを顯し、凡

あくしゃおよそ よく われせたい い よ なんぢ いえ もの に ひ に
の悪者凡の慾は、我聖體の入るに依りて爾の家となりし者より逃ぐるること、火より逃ぐ

ごと たま われそのてんたつしゃ もろもろ せいじゃ しょひん しんし なんぢ ぜんく
るが如くならしめ給え、我其轉達者として、諸の聖者、諸品の神使、爾の前驅、

ちえ しと およ なんぢ むてんしじょう はは なんぢ すす じれん しゅわ かれら
智慧なる使徒、及び爾が無玷至淨の母を爾に進む、慈憐の主我がハリストスや、彼等の

きとう い なんぢ えきしゃ ひかり こ たま けだしひとりしぜん しゅ なんぢ われら たましい
祈禱を容れて、爾の役者を光の子となし給え、蓋獨至善の主や、爾は我等の靈

せいせい こうみょう われらみなかみ しゅさい よろ ところ ごと ひび こうえい なんぢ けん
の成聖と光明なり、我等皆神と主宰に宜しき所の如く、日に光榮を爾に獻ず、

【 第四祝文 】 しゅ われら かみ ねがは なんぢ せいたい わ ため
主イイスハリストス我等の神や、願くは爾の聖體は、我が爲に

えいせい なんぢ そんけつ つみ ゆるし ねがわ こ かんしゃ まつり わ ため きえつ
永生となり、爾の尊血は、罪の赦とならん、願くは此の感謝の祭は、我が爲に喜悦

そうけん あんらく またおそ べ なんぢ さいど こうりん とき われざいにん なんぢ こうえい
と壯健と安樂とならん、又畏る可き爾が再度の降臨の時、我罪人に、爾が光榮の

みぎ た え たま なんぢ しじょう はは しょせいじん きとう よ
右に立つを得せしめ給え、爾が至淨の母と諸聖人との祈禱に依りてなり、

【 第五祝文 至聖生神女に捧ぐ 】 しせい ちょさい しょうしんぢよ わ くら たましい
至聖なる女宰・生神女、我が味みたる靈の

ひかり わ たのみ おおい かくれが なぐさめ よろこび なんぢ われた もの なんぢ こ しじょう
光、吾が憑恃と幘幘と避所と慰藉と歡喜や、爾が我堪えざる者に、爾の子の至淨の

たいしそん ち う もの え たま なんぢ かんしゃ なおいの まこと ひかり う
體至尊の血を領くる者となるを得せしめ給いしを爾に感謝す、猶祈る、眞の光を生み

もの わ ころろ れいもく あきらか ふし いづみ う もの われつみ ころ もの い
し者や、吾が心の靈目を明にせよ、不死の泉を生みし者や、我罪に殺されたる者を生

たま じれん かみ じあい はは われ あわれ わ ころろ しょうかん ひつう わ おもい
かし給え、慈憐なる神の慈愛の母や、我を憐み、吾が心に傷感と悲痛、吾が思に

けんそん わ とりこ いねん よびかへし たま われ いき た いた ならび つみ え
謙遜、吾が虜となりし意念に呼還を賜い、我に呼吸の絶えんとするに至るまで、罪を獲

しじょう きみつ せいせい う たましい からだ いやし う いた ならび われ
ずして、至淨なる機密の成聖を受けて、靈と體との醫を得るを致し、並に我に

つうかい うけとめ なみだ あた しょうがいはんぢ かししょうさんえい たま けだしなんぢ よよ さん
痛悔と承認との涙を與えて、生涯爾を歌頌讚榮せしめ給え、蓋爾は世世に讚

び こうえい み こうむ
美と光榮とを満ち被る、「アミン」